慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	仮面ライダーたちの変貌 : 新人類世代と新人類ジュニア世代
Sub Title	
Author	小谷, 敏(Kotani, Satoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2006
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.11 (2006.) ,p.20- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 子どもたちと他者 : コミュニケーションの変貌と現代社会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20060000-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 11 号（2006）

仮面ライダーたちの変貌

―新人類世代と新人類ジュニア世代―

小谷　敏

1．仮面ライダーたちの変貌

（1）平成の仮面ライダー

のっけから私事で恐縮だが、論者が骨髄移植の治療から退院したのは１９９９年の１２月のことである。その直後の２０００年１月から、『仮面ライダークウガ』（テレビ朝日系列）が始まった。自宅療養のため休職中だった論者は、当時まだ幼かった二人の子どもと一緒に昔懐かしい仮面ライダーの新シリーズを毎回みていた。「クウガ」は初代仮面ライダーから数えて１１代目。平成になってから、初のシリーズ。テレビ局を TBS 系列からテレビ朝日系列に乗り換えての再出発である。

周囲を見まわすと、子どもたち以上に「第一次おたく世代」とも「新人類世代」ともいわれた年齢層（当時３０代）の母親たちが、この番組に熱狂していた。『クウガ』は、十分大人の鑑賞に耐える作品に仕上がっていた。しかし、ストーリーの魅力だけで、大人の女性が「クウガ」に「はまった」とも思えない。主人公・五代雄介役のオダギリ・ジョーと、彼とともに闘う刑事（一条薫）を演じた葛山信吾。この二人の「イケメン」俳優の存在抜きにお母さんたちのこの熱狂はありえなかったであろう。五代と一条の同性愛的関係を妄想する「やおい」系サイトがネット上にひしめいていた。最盛期にその数は 300 を優に超えていた。

「クウガ」の成功の後、『仮面ライダー』はあきらかに変質していく。仮面ライダーの数がどんどん増えていった。「クウガ」の次の「アギト」では３体。さらに次の「龍騎」に至っては１５体［ライダー１３体。擬似ライダー２体）の仮面ライダーが登場している。「龍騎」のなかには、平素は悪徳弁護士（！）であるライダーさえいた。子ども向け特撮番組が「勧善懲悪」の枠組を踏み越えてしまったのである。それどころか「龍騎」の仮面ライダーたちは、最後の一人になるまで殺し合いを演じている。

仮面ライダーは何故かくも「増殖」していったのか。製作者側もその意図については明言をしておらず、あくまでも仮説に過ぎないが、二つの理由をあげることができる。一つは、ライダーの数を増やして、自社製品をたくさん売ろうというスポンサーのオモチャメーカー・バンダイの思惑である。アニメや子ども向け特撮番組と同時に、そのキャラクターグッズ商品を売りこんでいくいわゆる「マーチャンダイジング商法」は、日本最初の連続テレビアニメ「鉄腕アトム」に始まる古い歴史をもつ。１９７３年に放映された初代の仮面ライダーにおいても、「仮面ライダースナック」が爆発的な人気を博している。仮面ライダーのシール欲しさにお菓子を買い、中味を食べずに捨ててしまう「事件」は社会問題として語られていた[1)]。

「アトム」であれ、「初代ライダー」であれ、まずアニメや特撮番組の企画があって、次にキャラクターグッズが生まれた。かつてはまず人気を博したマンガが、アニメや特撮番組という形でテレビ化される際に、タイアップする企業を募るという形が一般的であった。しかしいまやこの「作家」→「メディア」→「企業（商品化）」という流れは逆転してしまっている。作家の創意からではなく、企業のマーケティングの成果として新しい作品が生み出されるようになった。はじめに売りこむ商品の企画ありき、なのである。バンダイのイニシアチブで生まれた「セーラームーン」はその象徴的事例である[2)]。

ライダーの数を増やし、イケメン男優を多数登場させることで多くの母親世代を視聴者に引きこみたい。そうした製作者側の思惑も仮面ライダーの「増殖」を招いた大きな要因であったように思われる。「クウガ」における二人の美男俳優の起用も、母親受けを狙った可能性が高い。後にみるように「新人類世代」は、大人になった後からも、彼（女）らが若者や子どもだった頃の文化的嗜好を手放さなかった人たちである。主婦層のなかにも、「ボーイズラブ」と呼ばれる、男性同性愛を描いたマンガや小説の熱心な愛好者が少なくない。コミケットに群がる若い「やおい」族と、この点で彼女たちは地続きなのである。怪人たちとの死闘の後、五代と一条とが抱き合うようにして上る朝日を見つめる描写は、母親たちのなかにある「やおい」的嗜好を意識したものだとしか思えない[3)]。

この番組から巣立ったオダギリ・ジョーは、以後人気スターの階段を駆け上っていく。この成功に刺激されて「クウガ」以降、戦隊ものをも含めた子ども向け特撮番組は「イケメン」男優の登竜門と化していった[4)]。ワールドカップにおけるベッカムやイルハン、さらには「冬ソナ」でのヨン様への熱狂にも連なる「イケメン」ブームの一環としてこの現象をとらえることも可能だろう。「仮面ライダー」のような特撮番組が、子どもよりもむしろ母親たち＝大人を意識して作られるようになった。このことが子どもの世界に対してもつ意味は、小さなものではない。

（2）鏡としての「クウガ」

大人がマンガや特撮番組の熱心な視聴者になっている。当然それらの内容は、大人の鑑賞に耐えるものになっていた。しかしこれはよいことなのだろうか。同様の現象は、かつて少年マンガの世界でも生じている。６０年代末の対抗文化の時代、「あしたのジョー」をはじめとする少年劇画は、若者たちの間で圧倒的な人気を博していた。若者を読者層として意識した少年マンガ週刊誌の性や暴力の描写は過激なものとなった。そのことが大人たちによる「モラル・パニック」を引き起こし、当時圧倒的な発行部数を誇っていた「少年マガジン」の発行部数を一時的に大きく下落させてしまったのである[5)]。

「仮面ライダー」シリーズでも、暴力場面の残虐性が大人向けにヴァージョンアップしていった。クウガとその敵方「未確認生命体（グロンギ族）」の首魁とが、物語の最終盤で対峙する。「クウガ」においては敵方も、人間の姿から怪人へと変身するのだが、この時二人は変身する前の、つまり人間の姿で激しい殴り合いを演じている。生身の人間が、互いに口から血を吐きながら殴り合うので

ある。当時４才だった論者の息子は涙ぐみながらこの場面をみていた。こんな番組を子どもにみせたことを論者は深く悔いた。

６０年代末に少年マンガの性的暴力的描写が過激化した時には、大人たちの間にはモラルパニックが生じていた。しかし「クウガ」に対してそうした批判が起きることはなかった。論者の周囲の、子どもの教育に関心をもつ中産階級のいわゆる「意識の高い」母親たちまでもが、子どもと一緒に嬉々としてこの番組をみていたのである。「子どもにみせたくない番組」の上位には必ず「クレヨンしんちゃん」が顔を出す。しかし、「しんちゃん」はせいぜい人前でおしりを出すぐらいのことしかやらない。それに比べて、「口から血を吐いての殴り合い」の方が子どもに及ぼす悪影響ははるかに大きいと考えるのは論者だけであろうか。「意識の高い」母親たちの「教育的配慮」とは、自分の楽しみを物差しにした恣意的なものでしかないようである。

デスラー（「宇宙戦艦ヤマト」）、ショッカー（「初代仮面ライダー」）、ベルク・カッツエ（「ガッチャマン」）。論者が子ども頃のアニメや特撮番組のなかでは、悪者の多くがドイツ風の名前を名乗っていた。当時はまだ第二次世界大戦の記憶が色濃く残っていた。子どもたちの間にも悪の象徴としてのヒットラー＝ナチスというイメージは深く浸透していたのである。しかしいまや戦争の記憶ははるか彼方に遠のいてしまった。多くの子どもたちはヒットラーもナチスも知らない。当然、子ども向け番組に出てくる悪役のイメージにも変化が生じてくる。

「クウガ」の敵役は、長野県の古代遺跡から蘇った「グロンギ族」である。「未確認生命体」とも呼ばれている。彼らの名前も、彼らが語ることばもドイツ風ではない。バッタによく似た「ゴ・バター・バ」や亀にそっくりの「ゴ・ガメゴ・レ」等々の怪人が登場する。そして彼らは、「グロンギ語」を操っている。グロンギの会話とはこんな風だ。「ラダゴゼバー」（またこれか！）。「リグス・ギギバ・ギビラギ・デキダブゼビ」（見苦しいな、いきまいていたくせに）（I-NET ファンクラブ連合軍２００１：９２）。怪人の名称は、アジア系のイメージである。そしてグロンギ語の語順は日本語と同じなのだから、おそらくウラル・アルタイ語族に属する（それと近似した？）言語なのであろう。「クウガ」における「悪」は、あきらかに非西欧・非白人のイメージである。

初代仮面ライダーの敵役ショッカーたちの働く悪事は、たとえば幼稚園の通園バスを襲うというような他愛のないものばかりであった。こんないい加減なことで世界征服などできるのだろうか。それを考えると夜も眠れない。そんな人生相談（？）を当時新聞に寄せていた人がいたほどである（中島２００２：７３）。もちろん幼稚園バスは幼い子どもにとって身近なものだから、それが襲われるという設定は子どもたちを大いに怖がらせたことであろう。しかし、初代仮面ライダーの世界はなんといっても牧歌的な代物であった。

他方、グロンギたちの行動は残忍を極めている。そこが幼稚園のバスを襲って喜んでいるショッカーとの決定的な違いである。グロンギは、次々に人間を殺していく。しかも彼らは、規則を設けて「ゲームとしての殺人」を遂行していくのである。何分おきに。一回に何人。あるいはクラスの名簿順に…。グロンギたちのゲームの規則を発見し、次に殺されるのは自分だという恐怖に怯える少年の姿を描いた回もあった。これまでテレビやマンガの暴力場面は、子どもたちがマネをするか

ら問題だといわれてきた。しかし、グロンギ族の怪人たちの残虐行為は、子どもの真似のできる域をはるかに超えている[6)]。

「ゲームとしての殺人」ということばは、９７年に神戸で起きた連続児童殺害事件を彷彿とさせるものである。近所に住む小学校６年生の男子児童を殺害した１４歳の少年は、自分の通う中学校の校門にこの男子児童の切断された首を晒した上に、地元メディアに「さあゲームのはじまりです」という文言ではじまる名高い犯行声明文を「酒鬼薔薇聖斗」名で送りつけている。さらにこの番組の放映中には、１７歳になった「酒鬼薔薇」世代の凶悪事件が相次いで起っていた。「ゲームとしての殺人を行う怪人たち」。「クウガ」のこの設定には、当時の「多発し凶悪化する少年犯罪」のイメージが投影されている。

これまでのアニメや子ども向け特撮番組において、「悪」は外部からの侵入者であり地球征服という明確な目的を持つ者として描かれてきた。他方グロンギは内部（長野の山中）に潜伏しており、その意図を測り知ることさえできない存在である。グロンギ族には、青少年やアジア系外国人等々「内なる他者」への恐怖感が投影されている。１７歳になった酒鬼薔薇世代による「動機不明」の凶悪な犯行が相次いで起こったことをきっかけとして、少年法の厳罰的方向での改正が急がれたのはこの番組の放映期間中のことだった。そしてやはりこの番組の放映期間中に、東京都の石原慎太郎知事は、「第３国人」が大地震の際に騒擾を起こす可能性について言及した。２０００年当時の日本は、「失われた１０年」と呼ばれる長い不況のトンネルから脱け出せないでいた。その不安感を大人たちは、若者やアジア系外国人の上に投影し、「ユースフォビア（青少年恐怖症）」と「ゼノフォビア（外国人恐怖症）」とにとりつかれていたのである[7)]。「仮面ライダークウガ」という、子ども向け特撮番組は、そうした当時の大人たちの姿を映し出す鏡となっている。

２．大人も子どももいない。

（１）世代間文化障壁のメルトダウン

Ｎ・ポストマンは、子ども期の誕生と活字メディアの発達の深い関係を指摘している。活字メディアの登場以降、文化は書物を通して伝達・継承されるようになった。そのため識字能力は社会の成員にとって不可欠のものとなった。そして識字能力の獲得のためには、長い期間の訓練が必要になる。子どもたちを学校に隔離して、識字のための教育を施す必要から、大人とは区別されたものとしての「子ども期」が要請された。

しかし、テレビに代表されるエレクトリックメディアの普及に伴って、大人と子どもの間のこの区別は、自明なものではなくなってしまった、とポストマンは言う。テレビをみるためには、書物を読む時のような訓練は必要とされない。テレビの前に座る大人と子どもは対等の存在である。活字文化の時代の子どもたちは、性や金銭等、大人の世界の生々しい現実から注意深く遠ざけられてきた。しかしテレビの前に座る子どもたちは、犯罪や戦争などの禍禍しい現実に長時間晒され続けている。しかし、子どもを教育する責任感を失った大人たちは、この状態をただ手をこまねいて眺めている。子どもたちはいまや、活字文化以前の「小さな大人」の状態に先祖帰りしてしまった。

活字よりテレビが大きな影響力をもつ時代に、「子ども期」は存在しえないのである（Postman １９８２）。ポストマンのメディア決定論的な歴史観は、マクルーハンを想起させるものである。マクルーハン理論の妥当性を検討することはこの小稿の課題を超えているが、ポストマンの議論には首肯できる点が多い。

８０年代に「新人類世代」が話題になった。テレビのある環境のなかに生まれてきたこの世代の高いメディアへの親和性と、残業よりもデートの約束を優先させるといった彼らの徹底した「ミーイズム」は先行世代に大きな驚きを与えていた。そんな新人類世代も大人になり、彼（彼女）らの子どもたちも思春期にさしかかろうとしている。中西新太郎も指摘しているように、「新人類世代」の場合、その子どもたちとの文化的断絶はむしろ小さくなっている。消費文化と多メディア状況への親和性を親子で共有しているからである。そして新人類世代の人たちは、青年期の文化的嗜好を大人になっても保ち続けてきた。その結果、大人・若者・子ども、この３者の間の文化区分はいまや不明確なものになってしまっている。論者はこれを「世代間文化障壁のメルトダウン」と呼ぶ。母親たちが「仮面ライダークウガ」に熱狂している様は、「世代間文化障壁のメルトダウン」を象徴している。

子ども向けのアニメや特撮番組ばかりではなく、様々なポピュラーカルチャーの領域において、大人が子どもや若者の領分を「侵犯」する事例が目につくようになった。論者のゼミの学生がこんな話をしていた。「モーニング娘。」のコンサートに行ったところ、特攻服を着た自分の父親ぐらいの年格好の中年男性が大勢来ていた。そして口々に「加護ちゃあん、今日でぼくらも卒業だあー」とダミ声を張り上げていた…。防衛庁長官まで勤めた高名な政治家はやはりこの「モーニング娘。」の熱烈なファンであった。昼間は有能な社会人としての生活を送りながら、アフター５や休日は若者時代と変わらぬ趣味の生活に生きる。そうしたダブルライフを生きている者は、いまの子どもや若者の親世代のなかではけして珍しい存在ではない。少子化のなか、お菓子や玩具の市場も「大人買い」によって支えられている。

これとは逆方向の動きもある。これまで若者や大人のものだと考えられていた文化の領域を子どもたちが「侵犯」するようになってきている。子どものブランド服がいまや大変な人気を博している。数多のブランドを抱えるナルミヤ・インターナショナルは、その代表格である。同社は、不況と少子化の時代に７年間で売上を３倍に伸ばしている。ナルミヤ・ブランドは「ニコラ」・「ピチレモン」等の子ども向けファッション雑誌と手を携えて急速な発展を続けてきた。大沢あかねのようなカリスマモデルは、一つのブランドの売上を数倍に伸ばす力をもっていた。これらの雑誌の主たる購買層は、小学校の高学年の女子児童である。少女モデルの多くからは、読者層の年齢よりも大人びた印象を受ける。背のびをしたい、大人にみられたいという少女たちの願望にモデルたちは訴えかけているのだろう。

高価なブランド服を子どもが自分のお小遣いで買えるはずがない。子どもブランドの本当の消費者は新人類世代、あるいはそれ以降の世代に属する母親たちなのである。子ども服のバーゲン会場では、大枚（１０万円！）をブランド服に投じる母子の姿をしばしば目にする。「社会調査実習」で

子ども服ブランドをテーマに取り上げた学生たちも、同様の感想を述べていた（岩谷・山田２００５）。勤労者の給与が下がり続けるなかで、どうすれば子供服にこんなに大金を遣うことができるのだろう。「６ポケット」ということばがある。両親、父・母両方の側の祖父母と祖母。とくに金銭的に余裕のある祖父母の世代は、この少子化の時代、かわいい孫には惜しげもなくお金をつぎこむのではないか。子ども・親・祖父母。この３世代の合力によって、子ども向けブランド服は成長市場たりえている。

２００３年には、長崎県の佐世保市で小学校６年生の女子児童がクラスメートに教室で刺殺されるショッキングな事件が起きた。事件の被害者・加害者の双方が自分のホームページをもっており、そのホームページの掲示板上の書きこみをめぐるトラブルが事件の発端であるという説が事件直後には語られていた。もちろんこの事件を引き起こした要因を新しいメディアに帰着させるつもりはない。しかし、二人の少女が自分のホームページをもっていたという事実は、インターネット（以下 IT と略記）のような、かつてなら若者や大人のものだと考えられていた領域に子どもが「侵入」してきていることを物語っている。事件の直後には、あまりにも早く子どもたちが IT の世界に参入していくことを危惧することばが、メディアの上にはあふれていた。しかし、教育行政は財政削減の時代にも関わらず、教室へのコンピュータの導入を積極的に行っていった。大人たちは、子どもたちを IT の世界に進んで導き入れながら、こうした事件が起きると IT が彼（女）らに及ぼす悪影響を声高に叫ぶ。マッチポンプと形容する他のない、矛盾した態度である。ファッションのケースと同様、IT の領域においても、大人たちが自らの手で「世代間文化障壁のメルトダウン」を推し進めていったのである。

（2）「見捨てられた」若者たち

「団塊ジュニア」世代以降、「○○の世代」はあらわれきていない。いまの若者たちには「世代」としての名称がない。大人たちの若者への関心が一面で薄らいできている。その理由は二つ考えられる。いまの社会のなかで大人は大きな子どもであり、子どもは小さな大人であると述べた。青年期は子どもと大人の間の移行期である。子どもと大人の区別が明確でなくなれば移行期としての青年期の意味は必然的に失われていく。このことがまず考えられよう。

これまでの若者たちは、その「消費パワー」によってマーケッターたちの注目を集めてきた。若者言説の多くも実はマーケッターによって生み出されてきたものだったのである[8)]。しかし、少子化に伴う人口減少によって、若者たちの「消費パワー」は必然的に減衰していく。マーケッターたちは若者から、これから「団塊の世代」が参入してくるシルバー市場や、「新人類世代」の母親たちがバックに控える子ども（とりわけ女の子のファッション）市場へと関心の力点を移行させてきている。彼らはパワーを失った若者たちに見切りをつけて、若者に負けない消費センスと、若者をはるかに凌ぐ可処分所得をもつ先行世代のなかに、新たな消費のフロンティアを見ている。

６０年代以来のこの国における不断の情報革命の進展が、目まぐるしい「世代」の出現を招いてきた。とりわけ８０年代の「新人類世代」においては、彼らのメディアへの高い親和性が強調され

ていた。そして新しいメディアの出現が、世代間の断絶の感覚を強め、ひいては世代間の力関係の逆転現象を生じさせた部分のある面は否定できない。ポストマンもいうように、テレビの前では子どもも大人も対等の存在であった。しかし、コンピュータや携帯電話のような電子メディアの場合、大人と子どもは対等どころか、子どものメディアリテラシーが大人のそれを陵駕することは稀ではない。

情報革命は、いまなお進行中である。むしろ変化は今日、一層加速されてきている。もちろん、この情報革命に不適応をおこしている大人たちも少なくはない。そして、ポケベルでの文字送信のやりとりを女子高生が始めたことが、後の携帯メールにつながっていったというエピソードが示すように、若者や子どもたちがいち早く新しいメディアに順応して、大人が想像もつかない使い方を考えつくことはいまでもあるだろう。そして IT ヴェンチャーの担い手たちにも若者は多い。しかし、携帯電話やインターネットなど、普及してからまだ１０年もたたない新しいメディアが、広く社会に浸透している。それらはもはや、高い適応能力に恵まれた若者たちの独占物ではなくなった。大人たちはおろか老人たちまでもが、ネットや携帯電話をそれなりに使いこなしているのである。

新しいメディアが急速に浸透していった背景に、強い社会的強制力が働いていることは否めない。オフィスで PC やインターネットを避けていたのでは仕事にならないだろう。携帯電話抜きには暮しが立たない部分がでてきている。社会的孤立を望むのでなければ、誰しもがこうした新しいメディアにある程度習熟していかなければならないのである。たとえ強いられたものではあっても、広い年齢層社会層の人たちが、こうしたメディアを使いこなしている。情報化社会、情報革命ということばが聞かれるようになって長い年月がたっている。その結果、この国に生きる人たちは老若男女を問わず、新しいメディアに適応する能力をそれとは知らずに身につけてしまったのではないか。新しいメディアへの高い順応性は、もはや若者の独占物ではなくなってしまった。しかも若者たち以上に新しいメディア環境に順応しうる可塑性と学習能力とをもった子どもたちが、IT の世界に参入していく年齢が早まっている。若者たちが失ったのは、「消費の英雄」の地位だけではない。「上」（大人）と「下」（子ども）から挟撃されることによって「情報革命の寵児」としてのアウラをも、若者たちは喪失してしまったのである。

「団塊の世代」から「新人類世代」までの若者たちは、親世代との間に深刻な世代間断絶を抱えていた。貧困と欠乏の時代の記憶に支配され、戦前の権威主義的な教育と社会関係の記憶をとどめる親世代と、豊かで自由な社会の雰囲気を自明のものとして育った子どもの世代の間には、明かに意識の上での「断絶」が存在していた。しかし、「団塊ジュニア世代」以降、戦後生まれの第２世代が出現してきている。豊かさと自由とを自明のものとして育ってきたこと。そして、消費のセンスとメディアへの高い順応性。現代の親世代と子どもたちとの間には表面的には類似した部分が多い。世代間断絶がかつてのようには、突出した形であらわれにくくなっていることも、若者の文化や風俗への関心を大人たちが減退させていった一つの要因であろう。

３．ユースフォビアの方へ

（1）「凶悪なモンスター」としての若者や子ども

「仮面ライダークウガ」が放映されていた期間の日本社会はバブル崩壊に端を発する長期不況から脱け出すことができずにいた。銀行の不良債権処理は遅々として進まず、「国家破産」の噂さえまことしやかに囁かれていたのである。倒産件数と失業率はいずれも「戦後最悪」の水準を更新しつづけていた。不況の荒波は中高年を直撃し、自殺者の数は９８年以降、３万人を超えている。当時の日本社会の世相は暗く、人々は不安に苛まれていた。

日本の大人たちは、突如自分の身の上にふりかかってきた窮境を「わけのわからないもの」と感じていたのではないか。一生懸命に努力してきた自分たちが何故このような苦しみを味あわなければならないのか。クウガの敵方が「未確認生命体（アン・ノウン）と呼ばれていたことは象徴的である。当時の日本の大人たちは、正体不明の敵に苦しめられていた。そうだとすれば敵の正体をつきとめようとする動きが出てくることは避け難い。そこで敵として名指しされたのが、若者たちであった。

「ユースフォビア」ということばを創り出した中西新太郎は、この国のなかでは大人と若者の間の相互憎悪が広がっており、とりわけ大人たちのなかには若者たちをモンスターのようにみなす心性が広がっていると指摘している。「ユースフォビア」を広めるきっかけとなったのが、９７年に神戸でおきた連続児童殺害事件であった。大人顔負けの犯行の計画性と残忍性とが人々に強いショックを与えたのである。続く９８年には栃木県黒磯市で、ささいなことで注意を受けた中学生が、若い女性教師をナイフで刺し殺す事件が起きている。何か気に入らないことがあるとすぐに、「ムカツキ―キレル」若者たちのこらえ性のなさが、凶悪犯罪の原因として語られるようになっていった。そして少年の「心の闇」というきまり文句が生まれたのである。少年の引き起こす問題の原因は社会のなかにあるのではない。彼らの心のなかにこそある。だから問題解決のためには、彼らの心のあり方をかえなければならない。こうした観点から全国の学校にスクール・カウンセラーが配備され、臨床心理士が制度化されていった。

社会は変えることができない。だから自分の心を変えることで社会に適応を果たそう。小澤牧子は現在の若者たちのなかにある「心主義」という傾向を指摘している。「心主義」は若者たちばかりではなく、日本社会の支配的なイデオロギーとさえなっている。「心主義」を浸透させる追い風となったのが、一連の少年事件であった（小澤２００１）。

２０００年には、１７歳になった「酒鬼薔薇世代」の少年たちが、全国各地で忌まわしい凶行を引き起こしていくと、少年犯罪の「急増」・「凶悪化」があたかも公理のように語られるようになった。その結果、少年法の厳罰主義的な方向での改正が急がれたことはすでにみたとおりである。しかし、やはりこの時期には社会学者たちの間で、少年犯罪の急増・凶悪化は幻想に過ぎず、少年の凶悪犯罪は、その最悪の時期の数分の一（もっとも少なかった平成２年で７分の１、「急増」後の同１０年で４分の１）にとどまっているという指摘が相次いでなされていた[9]。海外の観察者たちも、厳しい状況におかれた日本の若者たちの「大人しさ」を不思議がっている。日本の若者は、いまや世界でもっとも人を殺さない人たちであるという指摘までなされている（長谷川２００３）。一部の

突出した犯罪者の存在をもって、若者の総体が「凶悪化」しているとみなす風潮が当時の日本社会を覆っていたのである。大人たちは、自分たちの抱える不安を投影することで、温順な日本の若者たちをモンスターに仕立てあげてしまった。そして少年犯罪の急増凶悪化という誤った事実認識に基づいて、少年法の厳罰主義的な改正という重要な決定がなされたのである。

しかし何故こうした事実誤認が生じたのだろうか。この事実誤認は「統計のトリック」の所産である。何かの問題が生じた時、メディアで参照される過去のデータは、せいぜい１０年程度のものでしかない。たしかに平成２年から平成１０年までの期間をみると、少年による凶悪犯罪は倍増に近い勢いで増えている。これが少年犯罪の急増凶悪化論の根拠とされたのである。過去４０年間５０年間に遡る長期的なデータが示されていたら、こうした事実誤認は生じえなかったであろう。またこれだけ「国際化」が叫ばれる時代でありながら、海外の少年犯罪のデータがほとんど参照されることがなかったのも不思議なことである。

治安悪化を叫ぶことは、警察組織の利益にかなうものである。治安維持のために重点的な予算と人員の配備が期待できるからである。特に西暦２０００年をはさむ数年間、警察組織は数多のスキャンダルに揺れていた。そして当時は、財政危機が喧伝され行政組織のリストラの必要性が叫ばれていた時代でもある。世間の厳しいまなざしにさらされていた日本の警察組織は、ショッキングな少年犯罪が相次いだことを「天佑」と感じていたのではないか。「多発し凶悪化する少年犯罪」というイメージがもたれることは、警察の組織防衛にとって極めて有利に働く。そうした警察の世論誘導にマス・メディアがまんまと乗せられてしまった面のあることは否定できないだろう。

では何故マス・メディアは、この「統計のトリック」を見破ることができなかったのだろうか。どこの新聞社にもテレビ局にも、立派な資料部門がある。警察白書ぐらいはおいてあるだろう。「多発し凶悪化する少年犯罪」という神話を崩す作業は、社会学者の手をわずらわせるまでもなく、ジャーナリスト自身の手でいくらでもできたはずである。少年犯罪をめぐる神話の浸透は、日本のジャーナリズムの体質と無関係ではない。閉鎖的な記者クラブ制度のなかで取材対象から様々な便宜を受け、公式発表を無批判に垂れ流す、日本のマス・メディアの体質は、厳しく指弾されなければならないだろう[10]。

またこうも考えることができる。少年犯罪をめぐる神話は警察組織だけではなく、マス・メディアの利益にかなうものでもあった。近年「報道のエンターティメント化」と呼ばれる傾向が強まっている。ワイドショーがその典型であるように、ジャーナリズムとエンターティメントとの境界は、曖昧なものになってしまっている。人々は報道のなかにも強い刺激や娯楽性を求めるようになった。センセーショナリズムをこととするエンターティメント化したジャーナリズムにとって、少年犯罪は、まさに「キラー・コンテンツ」と呼ぶべきものであろう。そうであるならば、あえて古いデータを持ち出してきて、少年犯罪をめぐる神話に水をかけることなどありえない。それは、せっかくの「キラー・コンテンツ」を失うことになりかねない行為だからである。警察組織だけではなく、マス・メディアにとっても少年犯罪は、「多発し、凶悪化」していなければならなかったのである。

（2）甘ったれた寄生虫―引きこもり・ニート・パラサイト・シングル

中西新太郎は、９７年ごろから若者たちの「縁辺化」が生じていると述べている。この頃から若者が社会の周縁に追いやられ、切り捨てられはじめたと中西はいう。「縁辺化」は少年犯罪をめぐる対応のなかに端的にあらわれている。若者たちは「酒鬼薔薇予備軍」とみなされ、そうした少年法の厳罰主義的な改正が行われたのである。そして、若者たちの未来の展望は極めて厳しいものになっていった。９０年代をとおして、若者たちの雇用は大幅に失われていったのである。労働市場においても若者たちの縁辺化は進んでいった。

９９年の秋には、山田昌弘の『パラサイト・シングルの時代』が刊行された。すでに仕事に就きながら、親の家に住み続けるパラサイト・シングルの存在こそが長期不況の原因であると断じたこの本は、強い社会的影響力をもった。パラサイト・シングルの増大によって、家電・住宅・自動車等々の「基礎的消費」が抑制され、日本は長期不況から立ち直れないでいると山田は指摘する。パラサイト・シングルの罪はそれだけにとどまらない。同じ OL であっても、親元から会社に通うのと、一人暮らしをするのとでは、可処分所得に大きな差が生じてしまう。本人の能力によってではなく、どこで生まれたのかによって生活水準が決定されてしまうのであれば、業績主義の原則は崩壊してしまうであろう。そうした危惧を抱く山田は、「親同居税」という「ムチ」と、親元を離れて暮す若者たちへの給付金という「アメ」とによる「寄生虫の駆除」を提唱している（山田１９９９）。

ミレニアムをまたぐ頃から、二つの若者像が生まれた。一つは「凶悪なモンスター」としての若者であり、いま一つは「甘ったれた寄生虫」としての若者である。前者は日本の治安を、後者は日本の経済的繁栄を破壊する、諸悪の根源として名指しされたのである。若者はグロンギのようなこの国の「内部に潜む敵」と考えられるようになった。しかし「甘ったれた寄生虫」についての議論も「凶悪なモンスター」についてのそれと同様、無根拠なものであった。

パラサイト・シングルの増大は、長期不況の原因ではなくむしろ結果である。若者の正規雇用の多くが失われ、収入が激減していったために親元を離れられない若者が増えたのではないか。住宅を借りるのにとくに首都圏では莫大なお金がかかる。低所得の若者にとってほとんどそれは不可能事であろう。貧しさ故に親との同居を強いられている若者から「親同居税」を取ればどうなるのか。おそらくそれは親が支払うことになるだろう。そして、親もまた低所得者であった場合、この税金の存在は恐ろしく残酷な結果をもたらすに違いない。

親元でぬくぬくと暮す OL が、けなげに自立している OL よりもよい生活を送っていることが、業績原理をおびやかしひいてはこの国の活力を奪うと山田は述べていた。しかしそんなことよりも、大企業の経営権や選挙区の地盤の「世襲」の方がよほど業績原理にとっての脅威のはずである。生まれには恵まれない、能力のある者が高い地位に就くことを著しく狭めるからである。しかし山田は、「世襲社会」・「二世社会」という問題については一言もふれていない。

山田は、若者の雇用の消失という経済の構造に根ざす問題を、彼らの依存性という「心がけ」の問題にすりかえている。そして山田は、経済の変動の被害者である若者たちに長期不況の原因であるという濡れ衣を着せた。そのことによってこの国の指導層の失敗から人々の目をそらさせ、「ユー

スフォビア」を煽り立てていったのである。

被害者であるはずの若者たちがムチ打たれるという倒錯的な事態は、フリーターに対する大人たちの対応のなかにも認めることができる。フリーターの増大は、長期不況によって労働市場が収縮し、若年労働力が企業社会から排除されるようになった結果生じた現象である。しかしそうした事実認識がこの国の大人たちのなかに根づくことはなかった。まじめに働く意思をもたない「怠け者」がフリーターになる。労働市場の収縮という構造的な問題は 看過され、フリーターの増大も「心がけ」の問題として語られている。

しかしどうして「フリーター」＝「怠け者」という言辞が力をもってしまったのであろうか。大人たちは過去の記憶に縛られている。若年労働力は、長く「金の卵」と呼ばれてきた。日本経済が「右肩上がり」の時代を生きてきた大人たちには、若者たちに仕事がないという状況を受け容れることができないのである。そしてゴードン・マシューズは、日本の大人たちのなかに根強い集団主義も、フリーターへの偏見を助長した一因となったと指摘している（Mathews ２００３）。どこの組織にも所属することなく生きるフリーターは、集団主義に骨がらみになっていた大人たちにとって「未確認生命体」のように映ったのであろう[11]。

「クウガ」が放映されていた期間、メディアにはフリーターバッシングがあふれ、高校や大学は「フリーターを出さない教育」を標榜するようになった。正規雇用が失われていく未来を直視して、そのなかで若者たちの仕事と未来とをどのような形で保証していくのか。そうしたまともな論調が、「ユースフォビア」にとりつかれていたこの時代のフリーター論議のなかで力をもつことはなかったのである。

４．ナルシシズム文化の運命

（1）「代行的消費者」としての子どもたち

子ども向けブランド服を買い漁ることも、首都圏では小学校６年生の１５％が挑むようになった私立中学受験も、ヴェブレンのいう「衒示的消費」の範疇に含まれる行動である（Veblen１８９９＝訳１９９８）。親のセンスや金銭能力、さらに中学受験の場合であれば所属階層を誇示するための、「見栄の代行者」として子どもたちが使われていることは否定できない。ここでは、「見栄の代行者」としての子どもという問題を考えてみたい。

クリストファー・ラッシュが『ナルシシズムの時代』を書き、カーター大統領が引用するほどの影響力をもったのは７０年代の末のことである。ナルシシストとは、ギリシャ神話のナルシスの物語が象徴するように、自らの幻影を愛する人間のことである。ラッシュは、エゴチストとナルシシストの区別を強調している。エゴチストは、自己を拡大し、他者をその支配下に置こうとする「尊大な自我（grandiose self）」の持ち主である。他方、ナルシシストは、他者や社会との生き生きとしたつながりを感じることのできない、無力で孤立した「最小限自我（minimal self）」なのである（Lash１９８４＝訳１９８６）。ナルシシストにおいては、自己と他者の区別がしばしば曖昧なものとなる。ナルシシストとは自己の幻影しか愛せない人間の謂いであった。ナルシストたちに、恋

人や子どもなど愛着の対象となる存在ができた時には、それは容易に自己と同一視されてしまう。

新人類世代が青春を迎えた８０年代に、ナルシシズム文化は全面的に開花していった。１９８０年には田中康夫の『なんとなくクリスタル』（田中１９８０）に影響されて最初のブランドブームが起っている。若者たちが「リッチでハイセンスな私」という幻影を手に入れるための消費に狂奔したブランドブームは、ナルシシズム文化の時代の到来を告げる現象であった。「新人類」世代は、ナルシシズム文化に浸って生きてきた人たちである。

「尊大な自我」の持ち主である１９世紀アメリカ「有閑階級」の家父長たちは、子どもを自分の所有物とみなし、見栄の代行者として振舞うよう彼（女）らに支配力を及ぼしたのである。ヴェブレン的主体にとって、子どもたちは「もの」もしくは「他者」なのである。他方、ナルシシズム文化のなかで育ってきた現在の日本の親世代の場合には、子どもを所有物とみなして、それに強い支配力を及ぼしているというよりもむしろ、子どもに自己を投影し一体化してしまっている可能性が高い。

母親たちが、必ずしも楽ではない家計のなかから子ども向けファッションに大枚を投じるのも、自分自身が少女の時代に戻っておしゃれを楽しんでいる気分に浸っているからではないのか。親が子どもに自己を投影し、心理的に同一化してしまう。このメカニズムは中学受験に熱中する親のなかにも見出すことができる。子どもの中学受験に家族一丸となって取り組んだあげく、結果が不首尾に終わると欝状態に陥る親の話を聞くことが多い。子どもと自分とが未分離の状態になっているから、子どもの挫折を自らの挫折と感じて抑鬱状態に落ち込むのである。ナルシシズム文化に浸って生きてきた、いまの親世代にとって、子どもとは自分の分身なのである。

（2）死を拒絶する文明

ナルシシズム的な人格とは、幻影的な自己像を維持することが至上命題となっているような人たちのことである。そうした人たちが、誰か他者と恒常的な人間関係を取り結ぶことは困難であることが予想される。長い時間の経過のなかで、自己のすべてを他者にさらけ出してしまうような人間関係のなかでは、幻想的な自己像を維持することは不可能だからである。職業生活の場合は、まだ限定的な義務と責任を果たしていればよい。しかし、結婚生活も、子どもを産み育てていく行為とナルシシズムとは両立しがたいものである。異性のパートナーも、そして子どもたちも「他者」である以上、常に自己愛を満足させてくれるという保証はどこにもないからである。今日、結婚出産の「適齢期」にあるのは、新人類世代以降に属する男女である。今日の非婚化・少子化のなかにナルシシズム文化が影を落としていることは、否定することはできない。

論者は先に「やおい」について言及した。論者の勤務校にも「やおい」的な二次創作の活動に熱中している学生は大勢いる。彼女たちは、自分たちがそうした活動をしていることを隠そうともしない。「腐女子」・「女おたく」などと自称している。そうした学生の多くは別段精神病理学的な徴候を示しているわけではない。そして生殖とは無関係な性愛的関係への夢想は、宝塚歌劇や女子校文化のなかにもある意味では存在していた。あまり深刻な意味をさぐるべき現象ではないのかも知れ

ない。ただ、「やおい」のなかで夢想されている男性同性愛のなかには、性暴力的な要素（たとえばレイプ）が色濃くあり、これまで性暴力の被害者でしかなかった女性たちが、加害者の側に立つファンタジーを楽しんでいるという中西新太郎の指摘は興味深いものであった（中西２００４：１３５）。ただ生殖から無縁の性愛であるというだけではなく、性暴力への傾斜という意味でも、やおい文化は「タナトスの文化」と呼びうるものである。

２０世紀に入るとタブーの対象が生殖と出産から、死へと移行していった。そしてタブーとされ、隠蔽されている死をのぞきみしたいという人々の欲求に応えて、怪奇マンガのような「死のポルノグラフィー」が巷にあふれるようになった。ジョフリー・ゴーラーはこのように述べている（Gorer １９６５＝１９８６）。「仮面ライダークウガ」は、グロンギ族による謎めいた残忍な殺戮の場面が番組の一つのセールスポイントになっていた。この子ども向け特撮番組もまた、「死のポルノグラフィー」としての性格を色濃く帯びている。もちろん 20 世紀においても、おびただしい数の性愛を主題としたポルノグラフィーが作られていた。しかしその多くが性暴力という人間の破壊的な攻撃衝動に訴えかける「タナトスの文化」に属するものであり、その意味では死のポルノグラフィーと性愛のポルノグラフィーの間に明確な一線を引くことはできない。

死のタブー化は、ナルシシズム文化と深い関わりがある。自分自身のしかも幻影しか愛せないのがナルシシストである。彼らは、自分たちが創り出した世界や、それを受け継いでいく後続の世代との間に生き生きとしたつながりの感覚をもつことができないでいる。ナルシストたちにとって自己の死はすべての終わりを意味しているから、それを受け容れることなど到底できない。死を受け容れることのできないナルシシズム文化の全面化が、死をタブー視させる風潮を強化させ、様々な「死のポルノグラフィー」を繁茂させていったのではないか。

（3）急がされる子どもたち

論者は先に、大人たちが「大きな子ども」と化していることを指摘した。では大人とは何なのか。人はいつ大人になるのか。こうした質問に明確な答えを出すことは、今日では不可能に近い。大人と子どもの間の区別は、今日極めて曖昧なものになってきている。経済的な自立は、若者から大人への移行の、もっとも分かり易い目安であった。しかし経済の収縮の結果、先進諸国ではどこでも若者たちの経済的依存の時期が引き延ばされていく、「ポスト青年期」現象が問題になっている。人間の寿命も延び、社会の変動もますます加速化されてきた。エリクソン理論のように青年期に確立されたアイデンティティで生涯を貫くことは、いまや困難なものとなってきている。これまでは青年期が「危機」の時代として語られてきたが、今日ではリストラや更年期障害等々、「中年の危機」が浮かび上がってきている。中高年の自殺の増大も、それと無関係ではない。

私利私欲にかられて行動するのではなく、公益を重んじるパブリックマインドの持ち主であること。自分たちの築き上げた世界を若い人たちに継承させていくことに強い責任感を抱いていること。これらは、「大人」に対して期待される倫理的資質である。しかしパブリックマインドを持ち合わせた大人などに今日日滅多に会えるものではない。大人たちは、自己と自己の属する組織の生き残り

に汲々としている。世界を大きく展望する責務を負っているはずの大学人たちでさえその例外ではないのである。玄田有史が指摘しているように、大人たちの雇用と所得とを守るために若者の雇用が削られ、彼らの未来が奪われている（玄田２００１）。「大体社会の本音はもうこれからの若者に興味がない。自分たちの世代が生き延びることで精一杯」と切通理作は言っている（切通１９９５）。至言であろう。大人たちは次世代を育て上げる責任を放擲してしまった。

大人たちは、子どもたちを急がせている。彼らを一日も早く大人の世界に導き入れようとしている。子ども向けブランド服の浸透が、子どもたちを幼いうちから一人前の消費者に仕立て上げ、中学受験が子どもたちを早くから競争社会の荒波のなかに放りこんでいることはすでにみたとおりである。子どもたちよ、「小さな大人」たれ。いまの大人たちは、子ども期それじたいを攻撃対象にそえてきている。事実、日本社会からは、ある意味で「子ども期」が失われつつある。作家・村上龍の書いた『１３歳のハローワーク』はベストセラーになった。「ハローワーク」とは、主として失業している人が仕事を探す場所である。まだ義務教育を受けている１３歳がどうしてハローワークに行かなければならないのか。中学生は仕事をしていないから失業者であると、村上は思っているのであろうか（村上２００３）。

どうして大人たちはこんなにも子どもを急がせるのだろうか。市場の収縮によって窮境に追いやられた資本の側が、親や祖父母と一体になった子どもたちの購買力に目をつけて、彼らを早くに市場に導き入れようとした結果であることは疑いない。そして、中学受験熱や『１３歳のハローワーク』がベストセラーになった背景には、子どもたちの「閉ざされていく未来」に対する親たちの焦燥が横たわっている。弱肉強食の社会のあり方は変え様もない。それならば人よりも早いスタートを切らせることで、わが子を有利な立場におきたい。早くから大人の社会秩序に適応させることが子どもの幸福につながる。いまの大人たちはそう考えているのである。

（4）子どもの権利の方へ

アリエスが、子ども期を近代の制度とみなしていたことは、広く知られている。１７世紀以降、子どもたちは大人たちとの生き生きとした交流の世界から切り離され、学校や家庭のなかに隔離されていった。アリエスは、近代を閉じ込めと監視の時代としてみる視点をフーコーと共有している。日本の子ども期の現状はどうか。子どもたちは、いまや徹底して大人の世界から切り離されている。その意味で、子ども期はいよいよ牢固なものとなってきたともいえる。しかし、消費者としての子どもは完全に「小さな大人」として期待されている。そして早くから、将来の企業社会の一隅に場所を得るための激しい競争にさらされていくのである。大人たちは、相変わらず子どもたちを家庭と学校の狭い世界に閉じ込めながら、彼らをグローバル化した経済の荒波から守ろうとはしないのである。そして資本の側と親たちの努力は一致して、子どもたちをいまの経済秩序に適応させることに向けられている。

子どもたちは、社会的な権利と経験とを奪われたまま、ホモ・エコノミクスとして早くに市場に引きずり出されていく。これは憂慮すべき事態である。子どもたちは、未来を生きる存在である。

だとすれば、子どもたちをいまの社会秩序に完全に適応させることは賢明ではない。未来には現代とはまったく異なる状況が生じているはずである。そして今日、変化の速度と規模とはかつてよりもはるかに大きなものになっている。子どもたちを早くから既存の秩序に過剰に適応させれば、未知の状況に対処しうる可塑性は、彼（女）らのなかからは失われてしまうだろう。子どもたちを「小さな大人」に仕立て上げる企ては、彼（女）らの未来を破壊するものであるといわなければならない。

いまこの国は、経済的価値の専制のもとに置かれている。子どもたちへのまなざしも例外ではない。資本の側は、子どもたちを消費者もしくは将来の労働力としてしか考えていない。親たちも、子どもの将来の豊かな生活（あるいはより惨めではない生活）を夢見て、子どもたちを「急がせて」いるのである。アリエスは、近代初期の教育者たちの子どもたちの人格を守り育てるというまじめな意図が、子ども期を生み出し、教育学や心理学の知見を発展させていく一つの大きな力となったと述べている（Aries１９６０＝訳１９８０）。経済的な価値の専制のなかに置かれたこの国のなかで、子どもたちの人格の成長に対する関心は極めて薄い。

子どもたちの人格を守り育てるためには、ではどうすればよいのか。子どもたちを一個の人格として尊重するのであれば、まず親たちのナルシスティックな幻想から彼（女）らを守らなければならないだろう。子どもたちが家族や学校の「閉じ込め」からある程度解き放たれ、地域の大人たちとの生き生きとした交流のなかで成長していく権利も保障されるべきである。他方、子どもを市場化しようとするあらゆる試みは厳禁すべきである。こうした提言を行いながら、論者は空しさを禁じえない。ナルシシズム文化と経済的価値の専制のもとに置かれたこの国の大人たちが、こうした提言をまともに受け止めるとは到底思えないからである。しかしこの国も「子どもの権利条約」を批准している。この条約を実効性のあるものとするために国内の関係法規を改正していく作業は、この国の子ども期のあり方を変えていく、現実的な第一歩となるのではないか。

【註】

1）鉄腕アトムにはじまるマンガとマーチャントダイジング商法の関わりについては、中野（２００４）が詳しい。

2）セーラームーンの場合には、バンダイがテレビ朝日に企画をもちかけ、テレビ朝日が講談社にマンガ連載の依頼をして、作者の竹内直子に白羽の矢が立った。

3）やおい文化については、東浩之（東２００２）が的確な説明を与えてくれている。

4）子ども向け特撮番組から生まれたイケ面男優として、玉山鉄二、賀集俊樹、永井大、要潤等々の名前をあげることができる。

5）マンガ批判をめぐる言説の整理は、山田（２００３）を参照されたい。

6）２００５年１月から放映された「仮面ライダー響」では、仮面ライダーは「鬼」と呼ばれ、伝統芸能のように「世襲」されていた。敵方は妖怪の一群であり、仮面ライダーと「ゲゲゲの鬼太郎」がフュージョンした

ような不思議な作品であった。暴力的な場面は影を潜め、ベテラン細川繁樹が主役を務めたこの番組は昭和の仮面ライダーのような長閑な作品に仕上がっていた。この番組はむしろ父親世代のノスタルジーに照準を合わせたものに思われた。

7）「ユースフォビア」ということばは、中西（２００４）に負っている。

8）マーケッターたちがかつて若者像を「捏造」してきた経緯については、植村（１９９３）を参照されたい。なお現在でも「下流」化する若者のステロタイプをマーケッターが生み出している状況がある（三浦２００５）。

9）広田（２００１）、鮎川（２００１）がその代表的な仕事である。また少年犯罪の凶悪化論に立つものとして前田（２０００）を参照。

10）２０００年に当選した田中康夫長野県知事は県庁記者クラブを解体する興味深い「改革」を行った。

11）近年ようやくこうしたフリーター＝怠け者論を批判する動きが社会学の若い世代の研究者を中心に出てきた。（本田・内藤・後藤２００６）。

【文献】

Arie's,P, 1960, *Lénfant et la vie sous Láncient Regime*（＝杉山光信・恵美子訳，1980,『〈子ども〉の誕生』みすず書房.）

鮎川潤，2001,『少年犯罪』平凡新書

東紀之，2002,『動物化するポストモダン』講談社現代新書.

玄田有司，2001,『仕事のなかの曖昧な不安』中央公論社

Gorer, G., 1966 *Death, grief and mourning*（＝宇都宮輝夫訳，1986,『死と悲しみの社会学』ヨルダン社.）

長谷川眞理子，2003,「世界一低い日本の若者の殺人率」「寺門交流」興山社，10月号.

広田幸照，2001,『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会.

本田由紀・内藤朝雄・後藤和智，2006『「ニート」って言うな！』光文社新書.

I-Net ファンクラブ連合軍，2001,『仮面ライダークウガ　マニア白書』コアラブック.

岩谷絵梨香・山田蓉子，2005,「子どもブランドの世界」（小谷編 2005 所収）.

切通理作，2004,「共有された個のあやうさ―９年間で変わったこと」『朝日新聞』３月４日付け.

小谷敏編，1993,『若者論を読む』世界思想社.

―――，2003,『子ども論を読む』世界思想社.

―――，2005,『若者文化を歩く』（大妻女子大学人間関係学部社会学専攻社会調査実習報告書　非売品）.

Lash.C., 1984, *The minimal self*: psychic survival in troubled times（＝石川義弘訳，1986,『ナルシシズムの時代』時事通信社.）

前田雅英，2000,『少年犯罪―統計からみたその実像』東京大学出版会.

Mathews.G and White.B (ed), 2003, *Japanese Changing Generations* –Are Young People Creating New Society Routledge Curzon.

Mathews.G., 2003, Seeking a career ,finding a job (in Gordon and White(ed)2003).

三浦展，2005,『下流社会』集英社新書.
村上龍，2003,『13 歳のハローワーク』玄冬社.
中島らも，2002,『中島らもの特選明るい悩み相談室　その 3　ニッポンの未来編』集英社文庫.
中西新太郎，2004,『若者たちに何が起っているのか』花伝社.
中野晴行，2004,『マンガ産業論』ちくま書房.
小澤牧子，2001,『心の専門家はいらない』洋泉新書 Y.
Postman N.. 1982 *The Disappearance of Childhood*（＝小柴一郎訳，2001,『子どもはもういない』新樹社.）
田中康夫，1980,『なんとなくクリスタル』河出書房新社.
植村崇弘，1993,「マーケティング時代の『若者論』と若者たち」（小谷編 1993 所収）.
Veblen.T., 1899, *The Theory of the Leisure Class*（＝小原敬士訳，1961,『有閑階級の理論』岩波文庫.）
山田浩之，2003,「マンガはどう語られてきたか」（小谷編 2003 所収）.

（こたに　さとし　　大妻女子大学人間関係部）